

第8回『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

・シンボルや VOCA を利用したコミュニケーション

1. はじめに

みなさん、あけましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

さて、ついやってきました。今回からはしばらく、シンボルや VOCA といったコミュニケーションエイドの導入について考えてみたいと思います。知的障がいや自閉症のある人のなかには、音声で伝えられたことを理解することに困難をもっている人がいます。つまり、話し言葉でしゃべられても、それが何を言っているのか理解することができにくい人がいるということです。周囲の人の話を聞いてそれを理解し、自分が期待されていることが何であるのかがわかるということは、社会生活をしていくうえでとても重要なことです。私たちは、色々な場面で音声によるやりとりをし、コミュニケーションしながら生活をしているわけですが、それが上手くできない人が知的障がいや自閉症のある人の中にいるということです。話し言葉を理解することができないことが原因で、人間関係がギクシャクしたり、他人に見下されてしまったりということもあるのではないかと考えられます。また、知的障がいや自閉症のある人から考えると、周囲の人が何か話しかけてくれるけれど、何を言われているのかわからないという状況では、とても不安になってしまうのではないのでしょうか。その不安のためにイライラしてしまったり、落ち着かなくなったりすることも考えられます。その結果、激しいパニックなど、周囲の人に受け入れられないような逸脱した行動をしてしまう可能性もあります。そして、周囲の人から、「あの人は、何を言ってもわからない人でどうしようもない人だ」、「問題行動のある困った人だ」という評価につながることもあるでしょう。しかし、よく考えてみてください。この評価は正当なものなのでしょうか。伝えられた情報を理解することができなかつたために、そうせざるを得なかつたのだとしたらどうでしょうか。だれでも周囲の人に受け入れられないような逸脱した行動をしてしまうのではないかと考えますがどうでしょうか。このような状況が家庭や学校、就労場所等、社会参加の場で起こっていたとしたらそれは不幸なことです。最も成長する時期である学齢期に、活動が制限されたり参加が制限されたりすることになってしまうと考えられるからです。

2. 安心できる環境を

アメリカに行ったことのある友人との会話です。彼が初めてアメリカに旅行をしたときのこと、日本に帰ってきた彼に尋ねました。

Q「どこで食事をしたの？」

A「マクドナルド」

Q「なぜアメリカまで行ってマクドナルドなの？それだったら日本でも一緒じゃない」

A「最初は安心できる場所が必要だったから、あそこなら、注文の仕方もわかっているし」

初めて海外に旅行した人が、日本でもよく見かけるファーストフードの店で食事をするというのはよく聞く話です。

初めて降り立った異国の地で、日本でも見かけたことのある看板を目にすると誰でも安心するのではないのでしょうか。

障がいの有無にかかわらず、わからない場所では見通しがもてなくなってしまうため、誰でも不安になってしまいます。そのような状況下、それも経験のない場所で食事ができるかという、そのようなことはなかなかできないということなのです。もしできたとしても、周囲をキョロキョロと見渡しながら、何が起るのかと五感を働かせ緊張しながらの食事になるでしょうから、味などもわからないかもしれません。

これと同じようなことは、知的障がいや自閉症のある人の日常生活のなかにも有るのではないかとと言えるのではないかと思います。周囲の人たちが何を言っているのかわからない不安な状況は、異国の地に初めて降り立った状況と同じようなものと考えられるのです。このような中では、相手がいくら親切に声をかけていたとしても、何を言われているのかわからず、どのようにしてよいのかわからなくなってしまうのです。それは不安を増す材料にしかならないのではないのでしょうか。

つまり、知的障がいのある子どもたちが、自分から積極的にいろいろなことにチャレンジしたり、コミュニケーションしたりできるようにするためには安心できる環境を整える必要があるということなのです。安心できる環境を整えることは、一つは構造化という方法です。これは、これまでも述べてきました。今回は、コミュニケーションすることができるような安心した環境を整えるための方法についてみていくことにします。